
SAO WhiteWizard

FORNEUS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S A O W h i t e W i z a r d

【Nコード】

N O 6 9 1 X

【作者名】

F O R N E U S

【あらすじ】

「これは、ゲームであっても、遊びではない」

ログアウトのできないSAOの舞台「アインクラッド」の最上部第百層のボスを倒してゲームをクリアすることだけがこの世界から脱出する唯一の方法である。そして、このゲームで死亡したり、現実世界でナーヴギアを強制的に外したりすれば、ナーヴギアから高出力マイクロ波を発せられ、脳を破壊されて死ぬことになる。

これは、そんなデスゲームを明らかに邪道な方法で終了させようとする、少女にしか見えない外見の少年の物語……。

Prologue

「これは、ゲームであっても遊びでない」

『ソードアート・オンライン』プログラマー・茅場晶彦

《カーディナル》それはこのソードアート・オンラインを制御する巨大なシステム。この世界のバランスを自らの判断に基づき二つのコアプログラムが相互にエラー訂正を行っている。更に、数多の下位のプログラムで世界の全てを調整している。モンスターのAI、アイテムや通貨の出現バランスをも……………。

何も無いディテールやテクスチャのない唯々黒い床。周りを見渡すと見ているだけで具合が悪くなりそうな程の数値の変動が映された空間。そこに、コートを羽織ってヘッドホンを首に掛けている少女にしか見えない外見の少年が満身創痍で立っていた。

「ついに…辿り着いたぞ…カーディナル……………！」

少年は目の前にある黒いコンソールの前に立ち、ホロキーコードを叩き込む。

「これで…終わりだ……………！！！」

彼がキーコードを叩き終えると無機質な音が空間全体を包み込んだ。

依頼

やあ、ボクは吉良沢雪だ。やる気がない？まあ、今更なんだが？ところで、ボクの趣味はハッキングだ。それで生計を建てていたりする。

この前もソナーだか何だかいう企業のファイアウォールを突破したりした。

まあ、そんな話はどうでも良いんだ。ちょっとコレを見て貰いたい。

回想

ボクは喫茶店に呼び出されていた。

「実は、今回ある事件について協力を仰ぎたいんだよ、Wizardの吉良沢雪君」

「ハム、ハム……もきゅもきゅ……ゴクン」

それにしてもこのケーキ美味しいなあ……。流石高いだけあるよ。

「聞いていたかい？」

この男は夜神。とある大企業の裏のトップだったりする。

「うん、どんな事件？」

「君もニュースとかで知っているだろうVRMMOのSAOのこと……」

「あのログアウト出来ないってやつ？」

「そう。その事件の事んだけどね、君にカーディナルへのハッキング、出来るならゲームの掌握……強制終了をお願いしたいんだ」
ボクもその事件には興味を持ち、外部からのハッキングを仕掛けたんだが、内部から弄るしかないようだった。まあ、ある程度は通るんだが……。

「ボクにログインしろって言うのかい？」

「まあ、そう言うことになるね」

どうやら、この男はボクに死ねと言っているようだ。

「此方でゲーム内での武装は何とかしよう」

「ボクのメリットはなんだい？」

「ログアウト迄の身体の保証と アカデミー への可能な限りの支援をしよう。コレでどうだい？」

む……………。

「分かった、協力するよ」

回想終了

という訳でSAOにログインする事になった。いや、なってしまった。

ボクがログインした後、夜神の手によって部屋ごとアイツの持つ医療施設に移送されるらしい。

まあ、アイツは約束を守るから信用できるだろう。

じゃあ、行ってくるかな……………？

ログイン直後（前書き）

どうしたら長く書けるようになるの？
じょじょ……
では、

ログイン直後

という訳でボクは《SAO》にログインした。名前は《Snow》にした。安直かも知れないが、ハンネは何時もソレだ。今回もソレに倣った。《仮想体》はわざわざ作成しても現実の姿にされるらしいので適当に作成した。最初、システムが誤作動してF（女）に認識されたときはシステムメニューを殴り付けた。

閑話休題

…… 此処まで約30分。
ログアウト出来ない世界（牢獄）にログインする（投獄される）には少しばかり呆気ない時間だった。

…… 本当に無いんだな。《システムメニューウィンドウ》を開いてもログアウトは無い。

そんなことを考えていると

『 雪君、聞こえているかい？ 』

「 夜神か！？」

『 ああ、君のゲーム内での名前は《Snow》か……。じゃあ、スノウと呼ばせて貰うよ？ 』

正直そんなことはどうでも良い……………。

「お前、どうやって通信してるんだ!？」

『それは企業秘密ってことで。それよりも、取り敢えず《アイテムウィンドウ》を開いて貰えるかな?』

夜神に言われた通り《アイテムウィンドウ》を開くと

「何だコレ!バグの塊じゃないか!どうやって送って来たんだ?」

『それも企業秘密ってことで』

便利だなあ、その言葉!

「使い方と注意点とかは?」

『話が早くて助かるよ。此方で用意した武器は、バグの塊だからシステムを多少エラーさせて存在している。その剣を装備して、別の武器の真名を呼ぶと、ソレに変化するんだ』

「……………最早何も言わないよ」

『まあ、今はそんなところだね。因みに、用がある時は《システムメニューウィンドウ》に此方で追加した《コンタクト》を選択してくれ。では……………』

何なんだアイツは!もしかしてアーガスを買収でもしたのか?

……………有りそうで怖い。

まあ、早速なんだけど、

「おい、嬢ちゃん？ちよつと俺達の言う通りにしてくれないか？」

何かキモい連中に絡まれた……。コイツらのカーソルは犯罪者を示す、オレンジ。抵抗しなければ、絶対に何かされるだろう……。唯、確かなのは、コイツらには実験台になって貰うということだ。ボクは夜神が用意していた剣ネームレスを装備する。

「……………約束された勝利の剣エクスカリバー 認証」

『 認証OK 』

ボクの手元にあった《ネームレス》は風の結界『風王結界』に包まれた聖剣に変化する。

「約束された（エクス） 勝利の剣カリバー ！」

ボクが真名解放を行うと、ソードスキルが発動した。

光の刃が振り下るされ、空気を引き裂きながら切断の光刃が走る。ソレに飲まれたプレイヤー達はポリゴンの破砕音とエフィクトを残り夢（SAO）からも現実からも消え去った。

「まあ、こんなものかな？それと、ボクは男だ……！」

幸い、彼らはオレンジプレイヤーだった為、ボクは何の罰則も受けて済んだ。ボクは言いたいことだけ言い残しその場からさっさと

立ち去った。

……ちょっとチート過ぎないか？夜神？

強制加入

.....ハア

何でいきなり溜め息ついてるか？まあ、コレを見てよ.....

回想

オレンジプレイヤー抹殺事件のあと、ボクはログイン時に無理矢理身体の一部として認識させたヘッドフォンで周辺の解析を行っていた。

「君は何者だね？」

真紅のローブに身を包んだ男がボクに話し掛けてきた。

「さあ？誰だろうね.....茅場晶彦」

そう、この男、茅場晶彦こそこの牢獄（SAO）を支配する男だ。

「良く気が付いたものだ。しかし、君が直接此処にやって来るとは思わなかったよ.....吉良沢雪君？」

やっぱり気付かれていたかあ.....。

「ボクはこのゲームを終了させる。依頼だし、ボクも囚われの身になっただしね」

「君の事だ、ゲームをセオリー通りにクリアする気はないんだろう？」

正直な所、現実で死なないんならこのゲームを楽しみたい位だが……。

「うん。ゲームをクリアしようなんて言ったら命が幾ら在っても足りないからね」

「良いだろう……。私はこのゲームの終了に関して、方法を問う気はない。どんな方法でも構わない、やれるものならやってみてくれたまえ。が、君には私のギルド 血盟騎士団 に入って貰おう。勿論、私の正体は伏せてもらうがね」

えっ……………！？

「では、また逢おう雪君、いや、スノウ君」

回想終了

ゲームマスター
黒幕にハッキングを容認されるとは思わなかったよ……………。

だけど、ボクが溜め息をついている理由はソレじゃない。

ボクはゲームマスター権限で無理矢理KOBに加入された上、ユニフォームの着用を迫られた。

ソコまでは別にどうという事は無かった。が……………

「何でだよ!」

思わず叫んじゃったよ。男用の服が着用出来ないんだ!どういう事だよ!何で《カーディナル》にまで誤認されるのさ!?

「どうしたの?新入り君って……………女の子なのに男用の制服が着れる訳ないよ」

さっきの叫びが聞こえたのか、栗色の長いストレートヘアの女性プレイヤーが声を掛けてきた。白と赤の騎士服 KOBのユニフォームを着ている事からKOBのメンバーなのだろう。

って、この人もボクを女だと思ってるし……………

「ボクは男だ!」

「ええ!?嘘だ!」

ボクがネームカードを見せると……………

「スノウちゃんね。……………うそ……………お、男の子なの……………?」

とてもビックリしていらっしやる……………。正直、ボクは泣きそつだ。

「男の娘なのね!」

「ビックク、ビックク……………ボクは男だよお!」

もう無理だよ!限界だよお……………

「あわわ!?ゴメンね、ホラ、お菓子あげるから……………」

「……………? ……ハム、ハム、……………もきゅもきゅ……………ゴクン……………」

「……………。か、かぁいい!お持ち帰り!」

貰ったお菓子を食べていたら、某雞見沢の住人のように変貌した人に抱っこされた……………。

「にゃわノノノ!?!……………所で貴女は誰?」

「ん〜私?私はアスナ。よろしくねスノウ!」

何てこつた……………KOBの副団長殿だったよ……………。

連行

茅場晶彦いや、ヒースクリフに男用の服を着れるようにしろ！って打診したが、あっさり、やっぱり拒否された……………。

それで……………

「ホラ、コレも着てみなよ！」

副団長殿にSAO内に有る服屋に連行され、着せ替え人形と化していた。

「やだよ！しかも、何でさっきからゴスロリばかり持って来るの！？」

しかも、ゴスロリを既に十着程着せられている……………。

「……………副団長殿、帰って良い？はじまりの街辺りに」「せめて、グランザムにしてよ！そして、私の事はお姉ちゃんと呼びなさい！」

と、言って更に三着持ってきた。

副団長殿はボクに、お姉ちゃんと呼べと強要してくる。

しかも弟扱いじゃなく、妹扱いで……………。

「呼んだら、もう持って来ない？」

正直、もう着たくない。疲れた。身体的にも精神的にも……………。

「うん……………。いいよ、この三着は着てよ？」

「分かったよ、お姉ちゃん……………」

もう、恥ずかし過ぎて状態異常になりそうだ……………。

「もう、二度と呼ばないから……………」

「えっと、後、二十着位持って来ようかな？」

「お願いだから、やめて……………お姉ちゃん」

「よし、許したげる」

てな、訳で計十三着のゴスロリ服を着せられて、一着買わされた。しかも、着なきゃダメらしい……………。

……………へ？色白主体で黒が混じった感じのだよ。

「と……………、こんな事があつたんだよ……………」

ボクは《コンタクト》で今、夜神と会話している。

『君も大変だな……………ククッ』

夜神、絶対に爆笑してるよ……………！？堪えきれて無いもん……………笑いを。

『……………まあ、君の要件は愚痴だけじゃないんだろう？』

「うん。実は、茅場晶彦に接触したんだ……………」

『君が未だに生きているという事は、ハッキングを黙認された、という事だろうね……………』

いや、黙認どころか許可まで貰ったんだがな……………直接。

「今回はコレ位かな？」

『ああ、それじゃあまた、何か遭った時に……………。っと、忘れる所だった』

「何を？」

『吉良沢優君と千樹憐君から君に、

「僕達のいも……じゃなかった、弟に、伝えてくれ。絶対に生きて還って来い！絶対に僕達は雪を助けるからな！」
だつて』

今、妹って言おうとしたよねえ……………？

優兄と憐兄……ありがとう……。絶対に生きて還るからね！

『では、この辺で……』

夜神が言い終わると同時に、《コンタクト》は終了された。

「スノウ、ちゃんと買った服着てる？」

因みに着てるよ……。無理矢理、初期装備の服を捨てられたから。

「にゃわ！？何でココにいるの？副団長ど……………」

「ん？また、服屋巡りしようかな！」

「呼ぶから勘弁して！？お姉ちゃん！」

「うん、よろしい」

副団長殿、改め、お姉ちゃんは大層、満足そうにしておられた……。

「だけど、アス姉じゃダメ？」

「うん、いいよ！」

即答でした。

んで、しばらく歩いていると……………

「で、何でボクは今、別の服屋という名の未踏破のダンジョンにいるんだい？アス姉……………」

「な、なんのことかなあ〜？」

スツ惚けていらっしやる……………。

ハア、詰んだなあ……………。

スノウはこの後五時間位、服屋から出られませんでした。

“無慈悲なる鎌”

ハア……………。

どうも、スノウです。例の如く溜め息から始まっている気がするけど、

気にしないで……………。

それじゃあ、どうぞ

「君に、任務を与えよう」

「嫌だ！ボクは働かない！」

「別に、私は君をボス部屋の前に強制転移させてもいいのだが？ああ、アスナ君にスノウが『服屋に連れて行って欲しい』と言ったとでっち上げて置くでしょう」

な、何だ……………と？ボクは死んじゃうじゃないか（精神的に）！

「誠意、お引き受けさせていただきます」

反射的に答えた。

「では、サポートにアスナ君を付けるとしよう」

ありがたいけど……………。《ネームレス》は見られたらヤバイんじゃない

……？

「あと、アノ剣についてだが、君のユニークスキルという事にして
おこう。使用条件は厳しくするがね」

なんとかしてくれるみたいだね。まあ、制限されるみたいだけど……。

さて、ボクはアス姉と44層の洞窟のような迷宮区に居るんだけど

……。
44って不吉だなあ……。

「スノウって、まだ一度もダンジョンに行ったこと無いの!？」

アス姉がビククリしながら聞いてきた。

「うん、そうだよ」

「じゃあ、今までどうやってレベルを上げていたの!？」

あ、やっぱり気になるんだ……。
ボクのレベルは、今31Lvだ。この前のオレンジ(忠義の名じゃないよ!)プレイヤー抹殺事件で、一気に30Lv位まで上がった。

……へ？ステータス？《筋力》と《敏捷》を3：7で上げている。他には、《隠蔽》と《索敵》かな？

「まあ、オレンジプレイヤーの集団に襲われてね……。全滅させたら上がったんだ」

「へ、へえ……。そうなんだ……。大変だったね」

「にゃわ／＼！？……。急に撫でないでよ、アス姉！」

アス姉はなでなでしてきた。何でだろう？

「ココからは、モンスターが出るから気をつけ……」

アス姉が言い終わる前に、黒い影が目の前を過った。

「早速、来たみたいだね……」

「スノウが、先に倒してみて」

ボクは《ネームレス》を装備して、モンスターに斬りかかる。

「喰らえええ！」

ボクが闇雲に斬り続けると、モンスターは破碎音とともに碎け散った。

「スノウ、どうして《ソードスキル》を使わないの？」

「ちょっと、訳があるんだ……。と、また出てきたね」

何度かエンカウントしたモンスターを倒して行くと、迷宮区の壁に不自然な割れ目があるのが見えた。

「ココにあるのは、扉なのかな……アス姉？」

「うん？私が前に来たときは、こんな無かったなあ？」

どうやら、アス姉も分からないようだ。

「入ってみようかな？」

アス姉は、その中に入る気らしい。仕方がないからボクも行くことにしたんだけど……。

「え……？何……アレ……？」

ソコには、見上げるような体躯に悪魔のような外見の、黒い大きな鎌を持った、モンスターがコチラを見下ろしていた。出てきたカーソルには《The Grimscythe》と出てくる。

“無慈悲なる鎌” 多分ボスモンスターなのだろうが、ココは踏破済みの階層だから、隠しボスなんだろう。

「……………!？」

アス姉はソードスキルを放とうするが、弾き飛ばされてしまう。

「アス姉……！？それなら………！」

「ノスフェラトウ紅き吸血剣 認証」

「 認証OK 」

ボクの手元にある《ネームレス》は、禍々しいオーラを放つ、血のように紅い片手剣に変化する。

それと同時にボクのHPバーが半分迄減少する。

『さあ、裁きを始めようか？』

ボクの頭の中に声が響く。……誰だコイツ？まあ、いいや。

「ノスフェラトウ！」

紅い剣の真名解放を行うと、ノスフェラトウから放たれるオーラが更に、鋭くなる。ソレを以てボクは“無慈悲なる鎌”に斬りかかる。それとほぼ同時に、奴も大きな黒い鎌を振り卸す。

「ハアアッ！」

ボクはソレを薙ぎ払うようにノスフェラトウを振ると、空間に紅

い切れ目が入り、ソコから紅い光の柱が現れて“無慈悲なる鎌”を呑み込んで行く。

更に、ボクはノスフェラトゥで黒い鎌を薙ぎ払い、切り裂き、薙ぎ払い、切り裂き……………を続けて、奴の両腕を完全に切り落としたところで、“無慈悲なる鎌”は凄まじい破碎音と膨大な黒い障気をあげて膨大な青い欠片になって爆散した。

「やった……………の……………かな？」

ボクはそう口に出すと、全体の力が抜けるのを感じて、床に倒れた……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0691x/>

SAO WhiteWizard

2011年10月22日06時19分発行